

日本人の上海経験

— 150年の流れをみわたす —

永井良和
東アジア研究班研究員
社会学部教授

はじめに 都市のイメージ

上海には、日本からたくさんの旅行者が向かいます。きょうのセミナー参加者のみなさんについてみても、そのうちの約半数が観光旅行あるいはビジネスなどで滞在した体験を持っておられるようです。

日本人は、上海という街に特別な気持ちを抱いています。たしかに、近年は東アジア、東南アジアを訪問する人が多くなりました。しかし、上海への気持ちは特殊なもので、これは他のアジアの都市と比べてもたいへんに興味深い現象です。上海に強い愛着が感じられ、また憧れのまなざしが向けられているのはなぜでしょうか。本稿では、そのような愛着や憧れが由来するところについて説明したいと思います。なお、タイトルには「150年の流れをみわたす」とあります。けれども、丁寧に進めれば、60分で話を終えることはできません。そこで、何十年かずつにまとめて、時代を概観していきたいと思います。急ぎながらになりますが、途中で関連する音楽も流す予定なので、了解していただきたい。

旅行で上海に行かれた方は、それぞれがそれぞれの「上海イメージ」をもっておられると思います。旅行から帰って、知り合いに「上海って、こういうところだった」というふうな土産話をされたでしょう。また、上海に行ったことがない人でも、実像とはちがっているかもしれませんが、ある種の「イメージ」を持っているはずです。もちろん、中国に対するイメージや、中国の人たちについてのイメージというものもあるでしょう。人は、特定の国や民族についてのイメージをもつように、都市についてもそれぞれのイメージをもっています。

きょうの講演会場は大阪のビジネスの中心地です。この大阪の街について、みなさんはどんなイメージを持っているでしょうか。最近であれば、吉本のお笑いや、タイガースの活躍が話題になりやすいと思います。しかし、何十年もこの街で暮らしている人にとっては、やはり「商売の街」というのがもっともぴったりのものかもしれません。商売の都市という意味での「商都」、工業の街という意味での「工都」という、そういう言葉もあります。大阪を「商都・工都」と

みなす傾向は、かなり強く、ひろい範囲に共有されているようです。

とくに大阪に暮らす人たちは、自分が生活する大阪の街を「商売の街」とイメージすることが多のではないのでしょうか。しかしながら、身をもって感じておられるとおり、現実には今の日本で大阪がビジネスの中心であるとはいえません。政治・経済の中心は東京であって、多くの企業も本社機能を東京に移してしまいました。情報の発信という点からみても、東京のマスメディアから与えられることがほとんどです。残念ながら、大阪は、「第二の都市」という言い方さえできないくらいに落ちこんでいます。

じっさいに、いまの大阪で盛んな産業は何かというと、これは観光なのです。

みなさんは、最近、道頓堀に行かれたことがあるのでしょうか。もう、近頃は行かないという人が多いのではないのでしょうか。芝居や映画を観ることが少なくなったし、おいしいお店も減ったし……。ということで、中高年の方が道頓堀に行かれることはあまりないと思います。それは、道頓堀が中高年の大阪人にとっての魅力を失ったからです。道頓堀にはあいかわずたくさんの方がいますが、その多くが観光客です。道頓堀は、昔のような街ではなくて、観光客向けの街に変わってしまいました。たこ焼き屋だとかラーメン屋だとか、わかりやすい大阪がそこにあって、全国から修学旅行でやってくる中高生だとか、アジアの国々からやってくる観光客が、大阪の雰囲気を満喫するために道頓堀に押し寄せています。私も、月に何度か道頓堀界隈を歩くことがありますが、大げさに言うと、日本語が聞こえないことさえあります。それくらいに、道頓堀は、外からのお客さんのための街に変わってきたのです。海遊館やUSJができたことで、大阪には実際にたくさんのお客客が来ています。修学旅行についても、奈良や京都などで寺社の見学をするというのではなく、海遊館やUSJと、道頓堀界隈をコースに組みこんだほうが、生徒たちには人気です。

沈滞している大阪の経済を救っているのは、修学旅行生や海外からの観光客を集めている観光産業だと見ることもできます。事実、大阪は、1970年代から商業都市ではやっていけない、工業都市ではつづかないと考えて、国際的な観光都市に転換しようとしてきました。1970年の万国博覧会からはじまり、オリンピックの誘致（今年、2008年は、大阪オリンピックが開かれるはずの年でした）にいたるまで、約40年にわたって、大阪は外からのお客さんを集めることで経済を立て直そうという努力をしてきたわけです。それが、うまくいっているかどうかといえば、あまりうまくいっていないところもありますが、現実を言えば、大阪は「工都・商都」というよりは、観光都市なのです。

反対に、京都という街については、どのようなイメージをお持ちでしょうか。京都という街には、古くからの伝統が息づいていて、それこそ日本のこれまでの深みのある文化を蓄積している、だからこそ、多くの観光客がおとずれる。大学もたくさんある。だから、京都こそが、あれこそが「文化観光都市」なのだ、と思われているのではないのでしょうか。それは、半面当たりなのですが、実は、京都市の産業では、工業がサービス業と匹敵するくらいの規模なので

す。工業出荷額をみると、工業都市のイメージが強い北九州市よりも、京都市のほうが多額の数字を示しています。京セラ、ワコール、任天堂といった企業名を思い起こしてください。これら世界的な企業は、みな京都を地盤として発展してきました。京都は観光で発展してきたように思われているかもしれませんが、その実、工業に従事している人たちが多いのです。京都は、いわば内陸型の工業都市で、統計を遡ってみるとサービス業よりも工業のほうがうまわっていた時期が長いこともわかります。けれども、京都を工業都市だというふうにイメージする人は少ないでしょう。

「工都・商都」と呼ばれ、叩き上げの商売人の街だと思われていた大阪市。そのイメージは大事にしなくてはならないところもあるでしょう。しかし、実態は観光やサービス産業に依存する体質です。いっぽう、国際的な観光文化都市というイメージが強烈な京都市では、産業の柱としての工業が依然しっかりと機能している。このようにみていくと、都市の実態と都市のイメージのあいだに「ズレ」があることが理解していただけたと思います。そしてイメージと実態とのちがいを検討することや、実態からイメージがどういうふうにつくられていくかを検討すること、反対にイメージが実態にどのような影響を及ぼすのかを検討すること。それらを考えていくのが、とりわけ重要な課題なのです。

1 上海イメージの変遷—最初の100年—

では、上海の話に戻りたいと思います。さきほど伺ったように、上海に行かれた方、行ったことのない方、それぞれが、いろいろなイメージをお持ちだと思います。行かれた方は、事前にガイドブックなどで上海についての情報を仕入れ、ああ、こんな街なんだと期待をされながら観光されるでしょう。そうすると、期待どおりの部分に楽しませてもらうこともあるし、期待が裏切られて落胆することもあると思います。

いっぽう、行かれたことがない方はどうでしょう。その方々は、上海について何のイメージも持っていないかというところではありません。何らかの先入観は持っていますが、それが修正されることもあります。たとえば、テレビのニュースなどで上海の映像とともに情報を与えられれば、それでイメージを変えることもあるでしょうし、逆に、やっぱり思っていたとおりの街なんだと、イメージを強化することもあると思います。

実際に行かれた方は、現実の街を見て、その経験にもとづいてイメージを修正するのですが、行ったことがない人は、行った人の体験や言葉をとおして、自分のイメージを確認したり修正したりすることになります。ですから、大阪のイメージや京都のイメージも、実際に行ったこと、暮らしたことがある人がつくっている部分と、そうではなく放送や新聞雑誌をつうじてつくりだされている部分とがあって、その両者は非常に複雑な関係にあります。

昔は、いまのようにインターネットもなく、携帯電話もありませんから、情報を伝えるのは

実際に行った人の経験談や、それを活字化した文字情報に頼っていました。実際に経験したことがイメージの中心になって、他の人に影響を与えていたと考えられます。イメージというのは、実際に行った人たちがそれぞれに個別のものを抱きますから、ばらばらです。そこから何らかの共通の部分が析出されて、それがたとえば大阪の街やイメージだとか、京都の街のイメージになるわけですし、上海の街のイメージも、そのようにしてつくられるといえます。

では、上海のイメージのなかで、もっとも中心的なものは何でしょうか。興味深いのは、「シャンハイ」という言葉そのものです。資料には、shanghaiを英語で綴った文字を掲げました。この言葉の、英語としての意味をご存知でしょうか。英和辞典をみると、Shanghaiと大文字で書き起こすと、都市名、固有名詞としての上海の街の意味になります。しかし、shanghaiと小文字で書き起こすと、これは動詞です。ある辞書を見ると、次のような語釈が与えられます。「麻薬を使って、船に連れ込んで出帆し、水夫にする」。麻薬を服用させる以外に、酒を飲ませて酔いつぶしたり、暴力によって船に乗せてしまえばあいにも用いられた言葉のようです。また、「誘拐する」とか、「暴力・不公正な手段を使って（人に）……させる」といった説明も載っています。シャンハイという言葉が英語で使うと、こういう意味にもなるわけです。これは、chinaという言葉が陶器をさし、japanといえば漆塗りの器のことをさしたのと同じです。英語を母語にしていた人たちからすれば、shanghaiというのは無茶をして連れ去るという動詞だったのです。国や街のイメージは多様です。いろいろなイメージがもたれているはずなのですが、それがひとつに凝縮されたときにどういう意味になるか。japanは、漆器に見立てられた。シャンハイという都市は、誘拐の多い街というふうにまとめあげられていったわけです。もちろんこれは英語の話であって、日本語の「しゃんはい」には、人をさらうという乱暴な意味はありません。

では、これから上海についてのイメージの変遷を追っていきたいと思います。説明しようとしている150年のうち、最初の100年分については、これまでいろいろな立場からの研究がなされてきました。歴史の領域、文学史の領域などで、それぞれが歴史の整理を試みてきました。いまから紹介するのは、和田博文さんという国文学者の整理で、日本文学のなかで上海のイメージがどのように扱われてきたのか、日本人が日本語で著したもののなかで上海はどのように描かれてきたのかを研究されたものです。和田さんのグループは『言語都市・上海 1840-1945』（藤原書店）という本を出しておられますが、そのなかに収められた「日本の言説空間における「上海」イメージの変容」という成果を参考にしたいと思います。

和田さんたちは、だいたい最初の100年間については、次の5つの時代に区分できると書いておられます。ひとつめは、アヘン戦争から日露戦争前までくらいの期間です。ふたつめは、日露戦争から五・三〇事件という労働争議まで。それにつづくみつめの期間は、第一次上海事変まで。よっつめは太平洋戦争の開戦まで。そして最後のいつつめが、太平洋戦争が終わる

まで、いう分け方です。これらの5つの区分のなかで、日本語表現の広がりの中で、上海のイメージがどのように変化していったのかを追いましょう。たいせつなのは、それぞれの区分が何年から何年までか、どのように区切るのが正しいのか、ということではありません。そうではなくて、イメージがどう変化してきたのかを知るのが目的です。この変化を知ることこそが、現在に生きる私たちが、今の上海についてどのようなイメージを持つのかということと関連するわけです。

まず、最初の時代区分、すなわち1840年から1903年まではどんな時代でしょうか。日本では、江戸幕府の終わりごろ、幕末から明治時代の末ごろに相当します。武士も庶民も、男も女も、みんなが着物を着ていた時代。その時代から、明治の終わりごろまでですから、日本社会が大きな変化を遂げた時代だといえます。このころ、中国も、いや当時は清国ですが、やはり大きな変革を迫られていました。清国はアヘン戦争を経験し、欧米列強の武力にねじ伏せられてしまいます。この時期に、日本から上海に行った人は、それほど多いわけではありません。例をあげると、高杉晋作が渡航したことが知られています。高杉は、アジアの同胞として清国の人たちを見ました。上海の人びとが欧米に虐げられているようすを、つらい思いで見たわけです。高杉は、単に同情だけでなく、このままでは日本も同じようになってしまうという危機感を抱きました。このような感想は高杉だけでなく、当時、日本から上海に行った人、日本で中国の状況に関心をもっていた人たちは、多くがそのような印象をもったといわれています。このままではいけない、遅れたままでは日本も清国と同じような運命をたどり、欧米に蹂躪されてしまう。——そのような危機感を醸成するような街が、上海だったということになります。100年間の最初の期間というのは、上海の街が日本の反面教師、こうなってはいけないというお手本だったといえるでしょう。

ふたつめの時期はどうだったかという、1904年から1924年までの時期です。日露戦争で日本はロシアに勝った（勝ったというよりは、引き分けにもちこんだといったほうがよいのかもしれない）ことによって、自信をつけました。その時期から昭和のはじめごろまでが、第2の時期です。中国ではこの時期、このままでは欧米に、さらには日本にまでいいようにされてしまうという危機感が高まり、大きな変化が起きました。国民党や共産党が生まれ、現在のアジア情勢のもとになるかたちができただけでなく、この時代だといえそうです。欧米列強は、上海でたくさんの資金を集め、また集めた資金を使って、近代的なビルを建設したり、道路や水道などの都市基盤を整備しました。

欧米は、ヨーロッパの先進的な都市と見まがうばかりの空間を、上海のなかにつくりあげました。そして、この時期の上海に渡った日本人は、こういった近代性、先進性を見るわけです。もちろん、街の背後には、昔ながらの暮らしをつづける中国人も数多くいました。しかし、上海の街に立った日本人の目にまず飛びこむのは、天を突く高層ビル群であり、近代的な娯楽であったわけです。そういった状況を見て、小説を書いたり、新聞雑誌に記事を書いたりする

人たちが現われます。この頃には日本の一般の人びともマスメディアから情報を得る機会が増えています。特別な教養をもたなくても、新聞や雑誌を読むことができるようになりました。たとえば、村松梢風という小説家があります。彼は、『魔都』という小説を書いています。大阪が「工都」や「商都」と呼ばれたように、上海は「魔都」と名づけられたわけです。いっけんマイナスのイメージのように映りますが、そのイメージのなかに都市としての魅力を感じさせる言葉でもあります。また、少しあとのことですが、横光利一が『上海』という小説を発表しています。

このように、上海の街は、〈日本にいちばん近いヨーロッパ〉として描かれました。ヨーロッパに行くのはいちばんのことでした。高いコストを支払ってヨーロッパに行ったとしても、日本人はまともに相手にされません。これに対し、上海は近くて気軽に行けるうえ、日清戦争・日露戦争の結果、日本人が自信をもって行くことのできる街だったのです。そういう点で、上海のイメージは、ヨーロッパに行かずとも先進的な都市経験を可能にしてくれる街というものでした。

みつつめの区分の期間には、アジアが揺れ動きました。結果として、中国大陸からは十分な情報が伝わってきませんでした。また、日本は中国に対して軍力で優位にあると思こんでいました。そして、中国人に対する偏見をもつようになりました。そういった偏見、マイナスのイメージが増幅されたのが、この時期です。日本からの情報は中国側に伝わっていたかもしれませんが、中国からの情報もあるていどは日本に伝わっていたようです。しかし、そういった情報も、まちがいをふくんでいたり、誤解を招くようなものだったといえます。この時期は、お互いに相手に対する誤解が膨らんでいった期間だといえるでしょう。

さて、4番めの時期には、日本と中国との間で戦端が開かれています。この時期になると、中国人から見れば、日本は財産や生命を脅かす敵です。反対に、日本人の眼に上海の街はどのように映っていたでしょうか。昭和戦前期にあたるこの時期、日本社会はたいへんな混乱を招き、内部に矛盾や問題を抱えていました。恐慌につづく不景気、農村もひどい状況におかれます。食べることさえできないという人たちが、少なからず出てきました。そのなかで、一旗あげたい、人生を上向きにさせるチャンスがあるかもしれない、そういった期待をもって出かけていく先が、上海の街でした。上海さえ行けばなんとかなる、そういうイメージが広がっていました。

けっきょく、日本の内地にあったさまざまな矛盾、たとえば貧富の差であるとか、いくら勉強に打ちこんでもそれが仕事につながらないといったこと。——現在にも通じるような暗い状況のなかで、希望を抱かせることができたのは、上海の街でした。興味深いのは、こういうことです。最初は反面教師だった。こういうふうになってはいけない、という見本だった。それが、憧れの対象に変わります。欧米と同じような近代的な文明がある都市です。しかし、中国の人たちと日本人たちのあいだには、誤解が蓄積され、トラブルが起こりやすい状況になる。

そうして、日本から逃げ出していく先、希望の街になっていく。

ここまでの4つの期間だけでも、上海という街のイメージは、右から左、上から下へと大きく揺れ動いていることが理解していただけたと思います。さらに最後の5番めの時期には、お互いに対するマイナスのイメージが固定化していったといえます。もう、相手は敵でしかない。大衆文化のなかでの上海は、川島芳子のような女スパイが跋扈する街、危険な街というイメージになります。あるいは、李香蘭（山口淑子）が演じたように、中国人女性も最後は日本人男性に従うのだというような、ご都合主義的なイメージが流布していました。日本は中国との戦争で苦境に立たされます。しかし、中国は、いつか日本の軍門に下るはずだ、という希望的な観測がありました。上海という都市で出会う男女のメロドラマに、そういった幻想を投影していたということでしょう。その間にも、日本国内の矛盾はいっそう拡大していきました。

以上のように概観したとき、単純化が過ぎるという感想もあるでしょうが、上海という街のイメージが100年間で大きく変化したことが読みとれます。そして最後には、なにか怖さをもった街、しかしそこにはチャンスがあるかもしれないと思える街、どうなるかわからないが人生を賭けてみることでできそうな街、そういうイメージになったといえるでしょう。

以上が、戦前期、第2次世界大戦までの流れです。

2 日本人の上海経験

さて、これを別の角度から見直しておきます。ここまでの整理は、和田さんのように日本人研究者が日本文学を研究して示された成果です。最近では、中国から優秀な研究者がやってきて、日本人が中国をどのようにイメージしてきたのかを、中国側の立場から再検討する作業をされています。次に紹介するのは、劉建輝さんの『魔都上海』という本に示されている内容です。そこには、和田さんたちとは少しちがった要素を見出すことができます。

たとえば、劉さんが関心をもって研究されたものに、漢訳洋書があります。漢訳洋書とは、ヨーロッパで発表された自然科学などのさまざまな成果を、漢字に置き換えて出版したものです。日本は、江戸時代に鎖国をしていて、朝鮮や琉球との継続的な交流を除くと、海外とのやりとりは長崎の出島に限られていました。相手国も、オランダと清国だけでした。オランダについては、キリスト教の布教をしないことを条件に商取引をしていましたが、医学など、実用的な分野においては新しい知識が入ってきていました。『解体新書』のような本が日本に伝わり、江戸時代に翻訳されたのも、そういった新知識を求める動きがあったことを示す出来事です。

しかし、多くのものは日本に入らないでいました。けれども、欧米の知識技術は、中国まで届いていたのです。中国には、たくさんの欧米の文献が集まっていました。そして、欧米の知識を吸収しようとする人たちが、それを漢字に置き換える作業に携わりました。この蓄積が、

漢訳洋書でした。日本は、開国と同時に、それらをいっきよに利用することができたわけです。日本人がヨーロッパの言語を一から勉強するのは大変なことです。漢語は読めます。ですので、まずは漢訳洋書を手がかりにヨーロッパの文明を知っていくわけです。

そういうかたちで、日本の開国がスムーズにすすんだ背景には、これら漢訳洋書の存在があり、上海にはそういった情報の蓄積があったことを、劉さんは指摘されています。だとすれば、日本人にとっての上海は、まずヨーロッパの知識の窓口だったということになります。先ほど示したとおり、このころ上海に出かけた高杉晋作は、欧米の進出に対して危機感をもちました。しかし、欧米との交流という点で、上海が先んじていたのも事実です。さまざまな情報が上海にあったからこそ、日本はそれらをうまく利用して開国に成功したと考えることもできます。文明の中継地としての上海は、東アジアで大きな働きをしていたといえるでしょう。劉さんは、上海のそういった面をあぶりだしておられます。

劉さんのお仕事のもうひとつの面白い点は、上海という街が特定の国家に所属しない「自由な新天地」という意味を担っていたという指摘です。上海には、租界というものが設置されていました。たくさんの国が上海にかかわり、多くの国からやってきた人びとが生活していました。それは、見かたをかえると、上海がどの国にも属さない街だったというふうにもなります。日本人からすれば、船に乗って数日で、そういう街に行き着くことができたわけです。上海には危険もありましたが、日本の国内よりは相対的に自由だったといえます。劉さんの指摘で重要なのは、この点だと思います。さきほど説明したとおり、戦時下の日本は、全体主義的な方向に進んで、個人の思想や行動の自由は抑圧されていきました。この、息づまる社会の近くに、自由を謳歌できる都市があるとすれば、それは魅力的に映ったことでしょう。憧れは自然なものです。さまざまな危険があったとしても、「今よりはましだ」と思える街だったわけです。劉さんの研究は、上海が「魔都」でありながら、どうして多くの日本人を惹きつけたのか、なぜ怖いとされる街に多くの日本人が渡っていったのか、そういった問いに対する答えを示していると感じます。私たちは、当時の日本人が「魔都」に憧れなければならないほどの、厳しい社会状況に置かれていたということを思う必要があります。

ここで、日本人が上海に憧れ、新天地を目指して「脱出」を試みた時期の音楽をとりあげてみたいと思います。まず、ディック・ミネが歌った「上海ブルース」です。1934年から35年にかけて発表され流行した曲です。この歌詞は、上海という街には出会いと別れがあり、しかしそこにこそ魅力があることを、男女の恋愛ストーリーに託して描いています。また、近年では自由劇場が舞台にした「上海バンスキング」でも、こういったイメージを読みとることができます。きらびやかなダンスホールがあって、美しいダンサーがいて、そして、うら悲しいジャズが流れている。そういう店に日本人たちが肩を寄せ合うように集まっている。国際都市に惹きつけられながらも、人生を踏み誤ってしまうかもしれない不安を共有している人たち。そう

いうイメージです。これが、戦前期の上海をもっともよく代表するものだといえます。この時期、多くの日本人が上海に移り住んでいます。1930年代から40年代には、51000人ほどの日本人がこの街で暮らしていました。つい先だつての朝日新聞の記事によると、近年、日本人が最も多く滞在している街はニューヨークだったのですが、ついに上海がニューヨークを抜いたそうです（2008年9月4日）。その記事のなかに書かれている上海の日本人の数字は、しかし、47000人です。つまり、この47000人という数字は、上海の日本人の過去最高ではなく、いまでも戦前期の数字が上回っているわけです。それだけ多くの日本人が、かつての上海にいたのです。もっとも、観光で行く人を考え合わせると、少しちがう感想があるかもしれません。昨年、日本から上海に観光で渡航した人は、115万人だそうです。1か月に10万人という数です。そういう意味では、現在のほうが上海を「経験」した人の数は多いかもしれません。

3 最近の50年

では、残された最近の50年についてふりかえっておきましょう。

1949年に中華人民共和国が成立すると、日本との交流は、ごくごく限られたものになりました。「竹のカーテン」という言葉が示すように、この当時の中国の状況を伝える情報は、ほんとうに少なくなりました。日本人が、中国のようすをうかがい知ることも、なかなかできませんでした。

情報が遮断された状況で何が起こるかという、それは、過剰な評価ということになります。たとえば、中国では革命が成功しているらしい、だから、日本でもそれに見習って国づくりをすべきだという人が現われます。また、自分は昔、中国でひどい目に遭った。いまの中国を信用してはならない、と敵意を募らせた人もいるでしょう。

ところで、この時期の大衆文化を見るかぎり、上海を描いたものを見ていくと、どうしても回顧的なものを中心になってしまいます。あのころの上海はよかった、というノスタルジーです。そういった種類の音楽を、次にとりあげておきたいと思います。津村謙が歌った「上海帰りのリル」（1951）が、典型的な例です。リルというのは人名ではなくて、マイ・リトル・ダーリンの略だという説もあります。さて、戦前の楽曲では、上海に日本人女性ダンサーがいて、そのダンサーとの恋を男が歌っています。これに対する「アンサーソング」が、「上海帰りのリル」だともいわれているようです。つまり、上海で別れたダンサーと横浜のキャバレーで再会するというストーリーが描かれている。つらい目にも遭ったが、しかし、上海での暮らしは古きよき時代の思い出として回顧されています。新しい中国、共産党の支配する中国からは、何の情報ももたらされない。しかし、高度経済成長のなかで激変する日本社会からは、その街の暮らしが、取り返したくても取り戻せないもの、失われたよき日々に見えるわけです。けっきょく、何も情報が来ないために、戦前期の「魔都」のイメージが、魅力的な部分を膨らませ

るかたちで維持されていったというふうに解釈できそうです。

さて、1978年に改革開放政策に転換して以降、1980年代には上海のイメージが大きく変わっていきます。そして経済的交流のみならず、文化面でも交流がすすみます。どこから変わったかというと、もちろん、経済、ビジネスの分野の影響を軽視することはできないのですが、女性雑誌の記事の変わりっぷりが大きいようです。当時の女性雑誌を読むと、2泊3日で上海旅行へ、と誘うものなどがたくさん出ています。そして、実際に上海の街に出かけて、こんな楽しい体験をした、こんな素敵なモノに出会ったという記事も書かれます。これがひとつの雑誌から複数の雑誌に広がっていき、若い女性たちにとって手軽な旅行先として上海が急速に浮上し、よいイメージが付与されていきます。この背景には、アジア志向というものもあります。しかし、東南アジアのタイやベトナムまでを含むブームは、もう少しあとの90年代のものです。上海が80年代に浮上したのは、その街が、まだ戦前のヨーロッパ・テイストを残しているモダンな都市として評価されたからでした。こうして、女性たちに、上海の複雑な歴史が街の魅力として再発見され、そこから若い世代に上海ブームが起こっていきます。1980年代には、戦前期の上海を実際に体験した世代は、すでに50～60歳代になっていました。この戦争を経験した世代と、同じ思いをもって彼女たちが上海に向かったとは思えません。むしろ、上の世代とは別の価値を新たに見出し、新たなイメージをもっていたからこそ、彼女たちは旅行先に上海を選んだわけです。

さらに中国が「世界の工場」から「世界の市場」に性格を変えていった1990年代には、上海も別の意味を見出される街になりました。生活レベルが向上したことによって、上海の街に「憧れ」を抱く人たちが増えていきます。面白い経験ができるという旅行レベルの話ではなく、若い女性たちが就職先として上海を選択するようになりました。この時期には、高学歴の女性たちが、香港やシンガポールに職を見つけています。同じように、上海にも、日本女性が流出しています。

さて、この時期の音楽として、PUFFYの「アジアの純真」という音楽を聴くことができます。この歌のなかで「シャンハイ」という言葉は、いちどしか出てきません。ですので、上海の歌ということにはできないのですが、アジアというひろがり、国境や言語の違いといった障壁を度外視して歌われています。

かつての日本人が、人生を切り開くために命を賭して出かけていった街、上海のイメージとは、大きく変わっています。ちょっと行ってみようか、という身軽さが、そこにはあります。そして、それは上海だけではなく、アジアという広さで意識されているようです。そういう世代が育っているという状況には、国境という、かつては人の移動にとって大きな妨げになっていたはずのものが、さほど強く意識されていないことが読みとれます。彼女たちも、しかし、国内ではなかなかチャンスを与えられないでいた存在です。実力があるのに男性優位の日本社会では働く意味を見出せない、いっそ……、というわけです。海外に羽ばたいた世代の体験は、

この世代のその後を追跡した須藤みかさんの『上海ジャパニーズ』に詳しくレポートされています。この世代の動きを見てみると、食い詰めて上海に出かけたという戦前期とはちがった志向を感じます。しかし、日本の社会にないものを求めているという点では共通します。自分を認めてくれない社会、自分が必要とされていないと感じる若者。そういった人を受け入れてくれる街が、上海だというとならえかたは共通しているようです。

なぜ、そのような魅力が上海にあるのでしょうか。それは、ひとことで表わせれば「多様性」ということでしょう。いろいろなイメージが輻輳する場所だからこそ、たくさんの人が、そこに自分の可能性があると思えるわけです。工業だけに依存する街では、工業で身を立てようとする人しか暮らせません。観光に依存する街は、物見遊山の客が一時滞在するにとどまります。しかし、工業都市であり、かつ観光産業が育っていれば、そこに、街とのいろいろななかかわり方、生き方が提供されます。年少者にも、高齢者にも、女性にも男性にも、さまざまな立場の人にとって、魅力がある街。活気のある街というのは、そういう多様な性格をもっていて、上海は、その好例といえます。

上海という街の150年間のイメージの変遷をみわたしたとき、私たち大阪で暮らす人間にとってどういう意味があるのか。それは、大阪を多様なイメージをもつ街として維持していくことにつながります。上海という都市がもつ活力は、過去から現在にいたる歴史のさまざまな面を、ゆったりと包みこんでいる空間がつくりだしているものです。

付記

本稿は2008年10月31日開催の第178回「産業セミナー」における講演のもととなった原稿を一部修正のうえ収録したものである。参考文献ほか、より詳細な議論は、関西大学経済・政治研究所研究双書第149冊に掲載されている。